

学習に落ち着いて取り組める学級作り

—津波を体験した子どもたちへの心のケアを通して—

宮城県仙台市立中野小学校 教諭 竹下 修央

nakano@sendai-c.ed.jp

キーワード：環境学習、津波、人とのかかわり、生きる力、絆、ESD、文集

1. はじめに

本校は仙台市の東側に位置し、南に七北田川、東は蒲生干潟に面し豊かな自然に囲まれた地域である。かつて蒲生干潟で見ることができた絶滅危惧種のコアジサシをシンボルバードとし、児童は本校の特色ある教育の一つとして総合的な学習の時間（環境教育）の一環として行っている蒲生干潟の野鳥観察「バードスタディ」を楽しみにしている。

そこで、この素晴らしい自然環境と、五感を働かせて体験学習で学んだことを各教科で身に付ける「比較・分類・関連づけ・類推」といったものの見方と考え方を総合的に活用し、言葉で伝える力をさらに児童に身に付けさせることを環境学習の目標に設定している。

野鳥の飛来地である七北田川や蒲生干潟を守りながら、人と自然が共存し、次世代へ環境を守ることの大切さをどのように伝えればよいのか、ESDの考え方を用いながら、平成22年度から2年計画でこの研究を進めてきた。そして、研究主題を、「子どもの心を動かす環境教育とESD」とし、学区内の干潟を題材として活動を行い、児童が学習の成果を発表するために、コンピュータを使って環境新聞を作成し、学校文集「杉の子」を配布している。学習したことをまとめた活動にコンピュータを活用し、情報処理能力を育てるこことを目標にしている。

しかし、東日本大震災により、学区が甚大な被害を受け、環境学習の場として蒲生干潟に立ち入りができなくなった。住居を失い、地域を失った児童の心のケアが必要になり、平成23年度はスクールカウンセラーの協力を得て、コンピュータを活用した心のケアのための授業を行っている。心が癒される画像や物語（紙芝居）を見ることで、効果的に指導を行う研究をしている。



写真1 津波による被害の様子

2. 地域の素材を活用した環境学習

学校文集を作成させるとときに、コンピュータの扱いが苦手な児童も自主的に作業できるように、担任が大まかなレイアウトを例示した。このことにより児童は、自分の考えをまとめる手順を理解できたようである。そして、いつでもどのコンピュータを使っても、自分の思い通りに文集のデータを更新できるようにするために、校内のサーバーに一人ひとりの学習用フォルダを作り、そこにある自分のフォルダを開き、データをいつでも変更できるようにして、児童が能動的にコンピュータに触れることができるようとした。また、表現したいことが効果的に伝わるように、学習用フォルダに写真フォルダも作成し、干潟での体験学習を行う度に写真データを蓄積し、いつでも自分の新聞に取り込むことができるようになった。



写真2 杉の子文集「環境新聞」(5年)

平成22年度はこの方法を高学年中心に行い、一人ひとりの児童が、蒲生干潟で学習したことなどをコンピュータを使って「環境新聞」として発表した。友達と作成したデータを見せ合うことにより、より読み手にわかりやすいような新聞を作ろうとする意欲が見られた。また6年生は、パワーポイントを使って蒲生干潟への取り組みをまとめ、「子供実践発表会」で発表した。



写真3 子供環境実践発表会の様子 (6年)

3. 児童の心のケア

平成23年度は、子どもの心のケアに効果的な資料をスクールカウンセラーから提供を受け、ICTを活用して物語や写真のデータを見せるを取り入れた。このことを校内研究として位置付け、全学級でICTを活用した授業を行った。文部科学省から頒布されているDVDや提示資料を用いることで、科学的根拠に基づいた目標に的確に迫った授業を展開できた。

表1 各学年の実践授業

学年	教科	単元名	ICT 活用等
1年	道徳	かばくんの気持ち	紙芝居
2年	体育	体ほぐし運動 ・G ボールを使って	PC DVD テレビ
3年	学級活動	心のケア ・あるるくんのぼうし	紙芝居
4年	総合	心のケア ・かばくんの気持ち	PC テレビ 紙芝居
5年	学級活動	心のケア ・大きな災害の後で	PC テレビ DVD スライド
6年	学級活動	心のケア ・大きな災害の後で	PC テレビ DVD スライド

《参考資料》

- 1・4年「かばくんの気持ち」 日本心理臨床学会
- 2年 「乗って、弾んで、転がって！」
- チャレンG ボール 明治図書
- 3年 「あるるくんのぼうし」 日本心理臨床学会
- 5・6年「災害から命を守るために（高学年用）」
- 文部科学省防災教育教材



写真4 4年研究授業の様子



写真5 6年研究授業の様子

今年度も引き続き学校文集「杉の子」の作成に取り組んだ。今年度は、干潟での学習の代わりに各学年テーマをそれぞれ決めて、総合的な学習の時間や国語の時間を使って行った。学習したことを新聞形式や作文にして校内文集として冊子にできるようになるまで、児童の表現力を育てたいと考えている。

4. 成果（児童の変容）

4. 1 平成22年度の取り組みから

コンピュータを使って自分の考えを表現する活動を通じて、国語科の「話す・聞く」の単元の学習に対する意欲が変化した。発表のための学習ではなく、必要に駆られ、相手に伝えたいことを伝えられるようなスキルを学ぼうとする態度が見られるようになった。また、手書きの新聞づくりにも変化が見られ、常に読み手を意識するようになった。

環境体験活動の事後作文に、

『今は少ししかできないように見えても、続けることで未来の蒲生干潟の環境は良くなる。』

『わたしが想像する未来の蒲生干潟は、コアジサシがすみよい干潟にしたい』

『未来の干潟は、もっと水がきれいになって…』

というESDの観点に迫る言葉が見られるようになってきた。

教科での学習を総合的な学習の時間（環境学習）の発表会や交流会で、自分のために生かすことができると児童が気付き、教科での学習に対して意欲的に取り組むことができるようになってきている。特に「書く」「話す・聞く」の領域での学習意欲に対する変化が顕著で、相手に考えを伝えることに意欲を持つことができるようになった結果、仙台市標準学力検査で作文を書く能力が上昇するなど、具体的な成果が形となって表れた。

4. 2 平成23年度の取り組みから

今年度は、心のケアの授業を通じて、心と体の緊張を自分で取り除き、ストレスから解放する方法を身に付けさせた。ICTを活用し、各教科で取り入れられるリラクゼーションの工夫、自分を理解する活動、他者の理解を深める活動、体ほぐしの運動、ヒーリング

（音楽）、ソーシャルスキルトレーニング（人間関係を高める活動）まで学習範囲を広げることができた。また、他の学年で行った授業を自分の学年で行うなどの交換授業も行うことができた。こうした授業をしていく中で、自分の気持ちや考えを作文や日記などに書くことができるようになり、災害後の自分自身の心と体の変化に真剣に向き合い、他の人の心の痛みを敏感に感じることができるようになってきた。

今後は、心と体をほぐす活動をさらに研究し、子どもたちのコミュニケーション能力を向上させていきたい。そうすることで、児童自身のこれから「生きる力」を育てていくことができるものと考えている。